

トランスジェンダー をいきる (6)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生 (3) 1 内発的男性性

1 始めに

前項では、外発的男性性について、女性性の高い A とのコミュニケーションにおいて、彼の行為が、自己の定義付けた男性性より下位にあると判断した場合、つまり、彼の行為より、自己の行為の方が上位の男性性を獲得している、と判断した場合に鼓舞されることを明らかにした。したがって、絶えず彼とのコミュニケーションにおいて、特に男性性に関して、そのつど優劣を意識しなければ構築することができない脆弱性を持った男性性の領域であることを示した。

本稿は、そのような外発的男性性とは別に、A の高い感情表出を利用しながらも、それとは別にほとんど信仰的に内面化している男性性を「内発的男性性」と定義付けた上で、外発的男性性との相互補完性によって、どのような男性性を構築してきたかについて考察す。

2 内発的男性性に関わるエピソード分析

内発的男性性は、外界からの刺激によって構築・強化される男性性の領域とは異なり、すでに内面化し、半ば信仰的な男性性の領域、すなわち、外界からの刺激とは無関係に、すでに確固として出来上がった男性性の骨格をなしている部分である。

その内発的男性性強化を下支えしているアイテムが「骨っぽさ」、「怒りっぽさ」、「悪戯っぽさ」、「理窟っぽさ」、「荒っぽさ」、「不良っぽさ」である。これを総称して「6っぽさ」と呼んでいる。次のエピソード分析は、この「6っぽさ」が見事に凝縮された内容である。

① エピソードの概要

現在でもそうであるが、私は極めて正義感の強い子供であったから、教師がある特定の生徒をえこひいきする場面には敏感に反応していた。前項で詳述したように、常に優秀な成績を収めていた A は、よく女性教師たちからのえこひいきの対象になっていた。彼に対して憧れと羨望を抱きながらも、女性教師たちからのえこひいき行為に対する彼の盲目的な受け入れに対して、少なからず怒りの感情を抱いていた私は、よく「寡黙になる」という手段で女性教師たちや A に抗議していた。

小学校 4 年生のある日、授業中に考え事をしていたところを、担任の若い女性教師に叱責された。そのとき、体調が優れなかったのか、嫌なことがあったのかは忘れてしまったが、その彼女の叱責が気に障って、2、3 日ほど寡黙に陥った。

いったん寡黙に陥った私を再び会話の中に引き戻すのは至難の業であることは、彼女も含め、クラス全員が知っていた。だが A は授業中や休み時間を問わず、無言の私にあれこれ話かけてきた。にも関わらず、私はそのような彼の関わり方に一切答えないことで、かえって一種の快楽を覚えた。それは、普段彼女からのえこひいき行為を盲目的に受け取っている彼に対する「反抗」が、私を「寡黙」へと駆り立てていることを、彼にも知ってもらいたかったからである。

しかし、いつまでも黙っていてよいのかという疑問が沸きあがってきた。そこで、作文の時間、私は思い切って次のような内容を、彼女にぶつけるようにして抗議文を書いた。

「なんであるとき、いきなり私に「天井向いて」なんて怒ったんや。A がちょっとでも上の空やっても怒らへんのに、なんで私やったら怒るねん。A と私はおんなじ人間ちゃうんか、、、A と私でもし人間が違うんやったら、どれだけ違うんか言うてみい」

抗議文は、彼女によって読み上げられた。それを聞き終わったとき、クラスは一瞬騒然としたが、A と泣き虫の女の子が、なんとしても私の口を開かせようと説得にかかり、彼女は泣きながら謝っていた。しかし、私はそれにも動じず、今度どんな作戦に出るか、ずっと観察していた。というのは、次の時間が校外学習で、1 年から 6 年まで全員集まるので、そのときに他の学年の教師や生徒たちから話しかけられても黙ったままであると、彼女の立場を悪くするだろう。だからなんとしてでも私をしゃべらせるために、わざわざこんな時間を設けたのでは? という疑念を抱いていたので、途中で駆け引きをしながらも寡黙を守り続けていた。しかし、A の次のような言葉によって、その形勢を揺るがされた。すなわち、今にも泣き出しそうな声で、「もういい加減にしてよ。僕、そんな牛若さんを見るのがつらいし嫌だ。頼むから僕のためになんかしゃべってくれよ」と言われたのである。「僕」という一人称で感情を吐露した彼の言葉にびっくりしながらも、今にも泣き出しそうな声と哀願の仕方に、ますます男性性が鼓舞されていった。そうだ。もともと寡黙を継続している目的は、確かに彼への反抗ではあったものの、授業中に突然叱責した彼女への抗議である。したがって、これ以上寡黙を継続することは、彼を泣かせてし

もう結果になり、彼女への抗議という当初の目的からは大いに逸脱してしまう。そう考えた私は、いきなり A の方に振り向きざまに、足をばーんと開いて、「わかったよ。あんたのためにしゃべってやる」と、何か決断や覚悟を決めたように男らしく言い放った。周囲は一瞬騒然としながらも、彼は「やったあ！牛若さんがしゃべってくれたあ！」と言って、女の子のように無邪気に喜んでいて。そんな彼の様子に、男として「可愛いやつ」と思いながらも、態度では、「なんて単純なやつめ」というようにふくれ面を決め込んでいた。このようにして、彼の前で乱暴な態度で沈黙を破って男らしくアピールしたこと、そのような態度による彼の女性性を引き出したことに成功したという喜びを味わったのである。

②エピソード分析

上記のエピソードを考察すると、次のようなことが言える。授業中に考え事をしている場面を教師から注意されることは一見どこにでもある光景だが、上記のエピソードでは、そのときの体調や心理状態、更には私に注意した彼女の口調などのさまざまな要因が複雑に絡み合って「寡黙」を引き起こした。その「寡黙」の中核にあったのは、「男は感情を表に出さない」という前節の定義であり、この「寡黙」が「骨っぽさ」と「怒りっぽさ」を象徴している。更に、私が「寡黙」に陥ったことで、A の女性性が発揮された。すなわち、黙して一言も話さなかった私を無視するのではなく、授業中や休み時間を問わず、粘り強く話しかけていた光景は、ともすれば痛々しささえ感じたほどであった。そのような彼の涙ぐましい関わりに対して、なおいっそう「寡黙」を強め、男性性を誇示した。この場面では、寡黙を継続することで、女性性の高い彼に対して、普段から彼女たちからのえこひいきの対象になっていることへの抗議の意味を含めた「悪戯っぽさ」によって、黙して語らない私を前に、手を焼いている彼をあざ笑うかのように楽しむという心性を垣間見ることができる。

その一方で、「これ以上黙り続けていいのか？」という疑問が沸き上がってきた。なぜなら、寡黙に陥った私への彼の女性性の高い関わり方に対する事実上の「敗北」、つまり、彼の私への粘り強い関わりが、私をそれ以上、寡黙にさせることを躊躇させたからである。

それと同時に今度は、「男だったらただ黙っていいのか？」という、自己の男性性を問う疑問が沸きあがってきた。そこで、沈黙を破って自己の感情を言語化して彼女に抗議したのかといえばそうではなかった。私の中では、「沈黙を破る行為」は、たとえ感情を言語化しなくても、無条件に彼女に敗北し、自己の発声によって、今まで堅持してきた男性性が崩壊し、一気に女性に引き戻される危険を意味していた。そこで、次の手段としてとったのが、「寡黙」を継続しつつも、作文の時間に「彼女への抗議文を書く」という行為であり、「理窟っぽさ」を持って自己主張したのである。

彼女によって代読された私の「抗議文」を聞き終わったとき、クラスの中は騒然としていたが、次の校外学習のために、なんとかして私の口を開かせようとする戦略的態度が見

て取れた。彼女の涙を含んだ謝罪・泣き虫の女の子の執拗なまでの説得というのは、私にとってはどちらも女性性を利用した手段での対応であったため、半ば辟易し、疑念を抱きながらも、「沈黙を破る機会」を伺っていた。そこに、Aの決め台詞、つまり、「僕」という一人称を背景に、感情を吐露したフレーズによって、形勢を揺るがされ、彼の私への接近行為によって、これ以上の寡黙継続の目的や必要性までもが疑わされた。このことは、私の強固な男性性より、彼の高い女性性の方が勝っていたこと、つまり、女性性の高い彼の関わり方への「全面敗北」を男らしく認めた。その結果、彼の方に振り向きざまに沈黙を破ったことで、「男らしく全面敗北したこと」を態度表明したのである。この態度表明の仕方が「荒っぽさ」、「不良っぽさ」の一面を示している。

しかし、女性性の高い彼への全面敗北を態度表明した先に、更に自己の男性性を揺るがされるような泥沼の敗北が待っていたのかといえばそうではなかった。男らしく全面敗北したことへの態度表明によって、更に彼の高い女性性が引き出されその引き出された彼の高い女性性を自己の心中に取り込むことで、全面敗北した男性性を復元させた。要するに、「負けるが勝ち」と言う言葉通り、全面敗北の中に、ある種の「勝利感」を見出したことによって、それ以上の敗北感を味わうことを食い止めたのである。

上記に示したエピソードには、内発的男性性強化に欠かせない「6っぽさ」のアイテムが見事に凝縮されている。この「6っぽさ」は、場面によって単独・複合し、強弱の差を生じさせ、年齢と共に手を変え、品を変えて変容している。

3 外発的男性性との相互補完性——本場の「男」より、更に1段高い「男」を目指す

このように、内発的男性性は、Aの女性性の高い感情表出を利用しながらも、最終的には自己の信念に基づき、納得した上で行動を規定するという意味で、男性性を半ば信仰的に位置づけ、内面化した領域である。では、このような内発的男性性と、前項で詳述した外発的男性性がどのような相互補完性を持って、男性性を強化していったのだろうか。

「自己物語の記述」では、特にFTMトランスジェンダーとの関連、つまり、服装や行動様式・言葉使いなどの社会的な女性ジェンダーの役割を、周囲から押し付けられたことへの抗議や反発を、どのように外在化してきたかが問われた。ここで明らかになったことは、「本場の「男」より、さらに1段高い「男」を目指すこと」であった。すなわち、Aを含めた周囲の男の子の服装や行動様式・言葉遣いといった外界からの男性文化を、外発的に自己の体内に取り入れる。しかし、外発的に取り入れた男の子の行動様式や言葉使いの中には、必ずしも男性性を誘発させるものばかりではない。したがって、それらをただ一方的に内面化するだけでなく、前項で示した内発的男性性を強化している「6っぽさ」を総動員し、ときに脆弱な反応を示す外発的男性性の作用を制するように働く。このことが、さらに1段高い男性性を強化する結果になり、「本場の「男」より、さらに1段高い「おと

こ」を目指す」という目的達成を生み出すのである。そこには、女性の身体を持ちながら、ジェンダーレベルにおいては、周囲の男の子より、さらに 1 段高い男の子象をいつも信仰的に強化して言った（現在でもそうである）という構図が浮かび上がってくる。「女性の身体である、ましてや視覚に障害がある」という二重に客体化されやすい現状に対する強い反発と欲望が、外発的・内発的男性性という 2 種類の男性性を生み出すことで、より男性性を強化させている、といっても過言ではないだろう。

4 終わりに——次回の予告

このようなプロセスで男性性を強化してきたが、早くも危機が訪れる。次回からは 2 回にわたって、「男性性存続の危機」と題して詳述する。(続く)

立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程